

“きび”考

2012年(平成24年) 第5号 2月発行

日本先史古代研究会

“きび考” 2012(平成 24)年 第 5 号 目 次

○古代吉備の遺跡と取り組み30年	若狭哲六……………2
○笠岡高島史跡 探訪紀行	山崎泰二……………3
○笠岡市高島 河田浩次氏所蔵 耳形柄頭長剣 調査報告	丸谷憲二……………5
○二千年の歴史、岡山の魅力	楠 敏明……………10
○九州説と畿内説の邪馬台国論を考える(1)	中島康之……………12
○連載 考古フアンのじゃれごと ④ 「古代社会の大産業革命と異民族の融和 水耕稲作乾田栽培方式」	山崎泰二……………15
○信濃から西国に下った井上氏族	井上秀男……………21
○連載 四国八十八ヶ所 巡り 「歩き(ウオーク)遍路の旅」 ③	樋口俊介……………37
○編集後記	編 者……………31

日本先史古代研究会「設立宣言」

日本列島には、遠く西アジアや中国から、もたらされた「知られざる古代遺跡」が数多く存在している。考古学・歴史学・民俗学的分野を超えての「先史的見知」により、分析・調査・研究を駆使して、日本の歴史を正すことを目的に、賛同者有志一同で「日本先史古代研究会」を設立する。

2009(平成 21)年 5 月 30 日(設立総会にて)

古代吉備の遺跡と取り組み 30 年

日本先史古代研究会 会長 若狭哲六

古代吉備には、多くの古代遺跡があります。それらの遺跡が、その構築が明らかにされていない。無理もない話である。その時代は、まだ文字も無く、誰一人として記録したものが無いからである。

1984 年 6 月、私は熊山に遺存されている「熊山遺跡」と出逢うことが出来ました。その頃、岡山県は瀬戸大橋完成までに、岡山の良さを全国に知っていただくため、県民に対し、①観光資源の発掘整備、②観光客受け入れの体制の整備、③観光宣伝を三本柱とする「観光キャンペーン」＝あじわいの岡山路を全国に向けて展開していたのです。私は、この機会に「熊山の再開発」についての提案をさせていただきました。

提案に対する県からの回答文によれば、熊山は文化財も多く、熊山の再開発は非常に困難とのことでした。熊山には、国の史跡とされている熊山遺跡があります。しかし乍ら、遺跡の構築は明らかにされていなかったのです。すなわち、遺跡は、「謎の熊山遺跡」というベールを張られていたのです。この謎の熊山遺跡は、昭和 13 年 6 月に地元の人にとって発掘されていて発掘後 13 年間は、学会に知らされていなかった。

その頃、地元の人により、発掘の様子が京都大学の考古学者、梅原末治博士に知らされ、考古学会に博士の考えが発表されていた。博士は、遺跡は「仏塔」であるとの説を発表されております。その後天理大学参考館の近江昌司により再考され、近江氏は「墳墓」を提唱されたのである。その後遺跡についての論証はなかった。

熊山遺跡は、昭和 13 年 6 月の発掘によって多くの出土品を出している。幸い私は、地元の古老より出土されていた遺物を見る事が出来たのです。そのことから、①1987 年 5 月②1988 年 4 月③1988 年 8 月④1989 年 7 月⑤1990 年 4 月⑥1991 年 12 月と六回の遺跡に関する小著を発刊することが出来ました。幸い 1991 年 12 月の小著は①米国国会議事堂図書館②トロント大学③ミシガン大学④ハーバード大学図書館より購読の依頼を受け収蔵されました。また中国社会科学院歴史考古学研究所にも届けることが出来ました。国内の大学および、研究機関からは、購読の依頼は全くありませんでした。

その後、20 年間、私自身、試行錯誤したことで昨年 5 月に熊山遺跡を軸とする論考をもって、新たに小著を発行いたしました。

「東アジアから見た 知られざる古代吉備 日本古代史の源流をさぐる」

です。小著では、謎とされていた熊山遺跡の構築の意義を明らかにし、鶴山丸山古墳に眠る王の謎に迫ることが出来たのであります。古代遺跡については、歴史・考古学分野から考証を進めなければならないことが出来るようになったと思います。まだまだ古代吉備、日本の古代は謎の多いところが多いとされています。日本の古代を考える上では、多くの研究者が大きなテーブルをつくらねばならないと思います。

編者注記 この本を購読希望の方は直接先生に申し込みください。A5版 293P 送料共 2950 円
連絡先＝tel/fax(0869)64-0184

笠岡高島史跡 探訪紀行

日本先史古代研究会会員 山崎泰二

日本先史古代研究会の発会以来の仲間に河田浩二氏と藪田徳蔵氏が、笠岡諸島の高島の住民として参加されている。当会の若狭会長の古い交流仲間で、後期高齢者の初老OB格である。この二人は高島生まれ高島育ちで、何より高島をこよなく愛され特に歴史に造詣が深い。元々は船員であったり、建築大工であったと伺っているが、それぞれ師を持たず独自の研究で今日がある。特に笠岡の高島は海上に浮かんでいる関係もあって、奇岩・磐座には亀や魚、鳥などの身近な自然のニックネームが付いている。当然のことではあるが陰陽の岩も点在する。中でも藪田徳蔵氏が熱を帯びた説明をなさるのが、自宅の裏山に存在する「子はらみ石」は単なる大きな岩では勿論ない。立派な神社(自作?)のご本尊である。

藪田御夫妻や数少ない共鳴者の河田氏などで参道＝ウオーク路・山路の階段を整備し。春・秋は草刈などに汗した後で、この岩を拝しながら一服。岩と対面しながらの思考の成果が大きな解説看板につながっている。太陽が昇り、陽が沈む。月が出て星が輝く。藪田さんの頭は少年の時代に遡ったかのような思考の世界を駆け巡っているのであろう。当然実年齢よりは頭が柔らかい。次々やりたいことが走馬灯のごとく廻っていて、まさに仙人とは彼等のことであろうか。

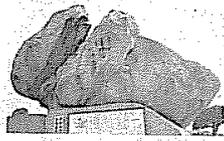
河田氏はお父さんの作市(故人)氏と二代に亙って同じ趣味で、この高島で収集した遺物を「高島おきよ館」なる私設の博物館を開設し展示公開されている。その 1000 点にのぼる展示品の中には、縄文・弥生・古墳時代から有史時代まで幅広い。この島が記紀に出て来る神武天皇東征伝承の児島高島の有力地であり、皇国史観たけなわの先の大戦中の昭和 18・19 年に京大、東大の錚錚(そうそう)たる山内清男・梅原末治・小林行雄・坪井清足などの先生方が学術調査を行っている。それとは別に河田親子の貴重な収集は定点調査をしているようなもので、陶器の欠片(カケラ)が何年かして、一体となり接合する破片を発見された時の感動の笑みの語らいは藪田老師に劣らない。

左に掲載した新聞記事は平成 16 年 2 月 12 日に山陽新聞に大きく取り上げられた記事で実物はこの「高島おきよ館」に展示されている。詳しくは丸谷氏の研究資料を参照していただくとして、3000 年前のイラン製の青銅剣がこの高島で収集されたとすれば、その意味するところの意義は深い。この地で縄文弥生の遺物が出て、神武東征有力地であることと、瀬戸内海の交通の要所であり弥生末期には吉備地方では稲作文化が大きく開花し、その深源が稲作の発祥地インド～中国南部の江南地方に求めることができ。西域の文化が水耕稲作伝来と共に海人(あま・かいじん)の手によって持たされたとする、通説の証になると信じて。遙か彼方の江南地方から親潮に乗って九州島北部そして瀬戸内海を海人族が東進する姿が記紀の伝承に重なって、この高島に残照を残し、奇しくも河田さんのお父様が手にされた時には、感動で身震いがして、神掛かった状況のもと息子の浩二氏にも詳しい経緯が伝承されなかったと想定する。(自宅の押入れに大切に保管されていた)

下の記事はこの紀行文を構想中に朝日新聞に 2012.24.1.14 付けの“島時間臨時便”に「高島おきよ館と河田氏」それに藪田氏の「子はらみ石」が紹介されている。時を同じくして高島に移住して来た若い家族の特集記事が山陽



新聞で連載され、過疎の島に希望の光が差し込んで来ているようだ。



高島の小高い山の頂にある子
はらみ石。東西8・3拵、南北
5・5拵、高さ4・7拵。島民
の間では懐妊と安産祈願の石と
してあがめられている。

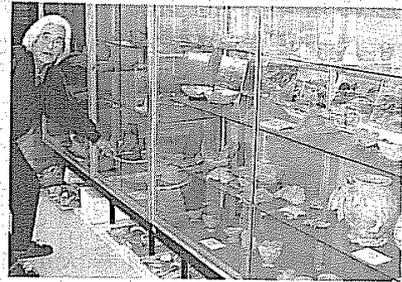
安産を祈願 高島

手作り博物館 高島

高島（笠岡市）の小高い丘に博物館「高島おきよ館」がある。島内から出土した原始から中世の石器類や土器、陶器など1千点以上を展示する。おきよは、島に滞在したといわれる神武天皇の船の名という。

島民有志が建築し、2005年にオープンした。

元船員、河田浩二さん(78)の自宅敷地からは戦前、大量の土器が出土した。京大と東大による発掘調査後も父の故作市さんが収集を続け、河田さんちはまった。「まるで島全体



が遺跡」と河田さん。

中世のころとみられる中国の青磁や白磁、紀元前1千年ごろのイランの青銅剣も見つかっている。

「高島が海上交通の主要な中継拠点地だったのでは」。想像は膨らむ。

しかし島は完全に高齢化している。二人の精魂込めた島の遺産も時と共に消滅する。せめてお二人がお元気な内は、雑草の蔓延る遊歩道は守らなくてはならない。昨年2度の訪問でも大変喜んで頂いた。春秋の除草作業を我々素人でもよければ、お伺い何かの役に立ちたいとの仲間の声も聞く。その節には皆様に案内します。美味しい空気と人情あふれる高島で、好きな歴史談義をしませんか。



左から3人目＝藪内さん 4人目＝河田さん

笠岡市高島 河田浩二氏所蔵 耳形柄頭長剣 調査報告書

日本先史古代研究会 会員 丸谷憲二

1 はじめに

日本先史古代研究会の史跡探訪として7月30日、11月20日に笠岡市高島を訪問した。高島在住の会員、河田浩二氏と薮田徳蔵氏に島内をご案内いただいた。高島おきよ館に河田浩二氏所蔵の青銅剣が展示されていた。紺谷亮一氏(岡山市立オリент美術館・現ノートルダム清心女子大学)の鑑定では、「青銅剣は3000年前のイラン製 極めて貴重」である。長さ75.6cm、重さ1.2Kg、柄頭に穴のある扇状の突起二つが付いているのが特徴である。実戦用ではなくて儀礼用と鑑定されている。



河田浩二氏所蔵の青銅剣

2 高島興与(おきよ)館

高島興与(おきよ)館は平成16年4月に山本米造氏、河田善治郎氏、河田浩二氏の3人の世話人によって設立された高島の資料館である。島内遺跡からの出土品を集めて展示している。高島は神武天皇伝説の島である。

2.1 興与とは

興与(おきよ)とは神日本磐余彦命(神武天皇)妃の興世姫命である。神島神社(岡山県笠岡市神島外浦1706)は、延喜式神名帳に備中小田郡神島神社とあり式内社である。創建は奈良時代(726)神亀3年と伝えられている。祭神は神日本磐余彦命(神武天皇)と興世姫命を奉斎する。「神武天皇は日向より東征の砌、吉備高島に8年間駐屯された。その後、海上より熊野に至り大和平定後、^{かしはら}櫃原の地に第1代踐祚の大偉業を成された。妃興世姫命は、部下を率いて当地に駐留され天業を扶翼してこの地に崩御された。近郷住民は、命たちの高き尊き御神徳を畏みて一大崇敬産土神と斎き祀った。」と縁起にある。



神島神社 通称 興世明神 (オキヨサマ)

神武天皇の皇后は、『日本書紀』では「媛蹈鞬五十鈴媛命(ヒメタタライスズヒメ)」。『古事記』では「比売多多良伊須気余理比売」(ヒメタタライスケヨリヒメ)、別名、「富登多多良伊須岐比売」(ホトタタライスキヒメ)。神武天皇は、東征以前の日向で吾平津姫を娶り子供も二人いた。『古事記』では阿比良比売(あひらひめ)。神武天皇の日向在住時に嫁し、手研耳命と岐須美美命を生んだ。

興世姫命の記録は神島神社のみである。つまり、笠岡の在地豪族の娘である。在地豪族の娘を正妃とすることで、在地豪族を懐柔していった。私は「吉備國の行館(高嶋宮)は笠岡市の神島宮となる。」としている。

『吉備(黄藤)国・高嶋宮伝承の解析』 丸谷憲二

『古事記・日本書紀』では吉備國に行館(高嶋宮)を設置したのは神武天皇としている。『陶山系譜』に「皇居之名神嶋宮ト侍ル。其後改而神嶋王泊ト号スハ寄ル。皇居地名也。」とある。

『先代旧事本紀大成経七十二巻本』には大歳在とある。笠岡市の馬飼・絵師・金浦・飛島に大歳神社があり、近くの浅口市鴨方町本庄に大歳天神社がある。浅口市鴨方町本庄鎮座の大歳天神社の最初の鎮座地が兄弟神である宇迦大神の山上である。山上より眺め最適の地を探したの意である。

他の高嶋伝承地の近くには大歳神社は無い。つまり、「大歳在」とは「大歳」が先回りしてお待ちしていたと解すべきであり、大歳神は方位神である太歳神と考察すべきである。つまり、吉備國の行館(高嶋宮)は笠岡市の神島宮となる。

3 青銅剣の発見場所

河田浩二氏は自宅改築時に青銅剣を押入れから発見された。入手経路は不明である。2001年(平成13)11月1日の山陽新聞「岡山・オリエント美術館の青銅剣・柄の芯に鉄」の記事を見て、形状がそっくりだとして岡山市立オリエント美術館へ鑑定を依頼された。紺谷亮一氏は「古代イランの青銅剣は1960～1970年代に日本で多く出回った」と報告している。土着民の盗掘による骨董市場への流失を意味している。しかし、河田浩二氏の父親や祖父が骨董市場で青銅剣を購入し押入れに秘匿していたとは考えられない。その理由は購入・秘匿する理由が無いからである。

4 製造推定地 イランの紀元前1000年頃

カスピ海西岸のイラン北西部で製造と鑑定されている。イランの歴史上、紀元前1000年頃の特記事項は、「預言者ゾロアスターがゾロアスター教を広める」である。ゾロアスター教で秦氏の弓月国と繋がる。(弓月は突厥語で火焰を意味する)河田浩二氏所蔵の青銅剣は、秦氏の渡来物と推定可能である。

4.1 製造推定地 タリシュ地方

紺谷亮一氏は北西イラン製のタリシュ地方で製造と鑑定している。当時のタリシュ地方は豊富な鉱物資源を生かした冶金術などが発達していた。岡山市立オリエント美術館蔵の耳形柄頭長剣も主にタリシュ地方で発見されている。タリシュ地方はイラン高原の主要な文化として「タリシュ ドルメン文化」と区分されている。

北西イラン タリシュ地方



4.2 ドルメンの定義

ドルメンとは巨大な石(岩)を利用して築造した巨石記念物の一つで地上や地下に屍を埋める石室を作り、

上に大石で覆いだ先史時代の墓である。ドルメンはメンヒル、列石、環状列石、石棺墓といっしょに巨石文化の一種である。ドルメンを日本では支石墓と呼んでいる。中国ではドルメンを石で作った家という意味で石棚と言う。墓部屋が土の中に埋められていて大石だけ現われているドルメンは「大石で墓部屋を覆いだお墓」として大石蓋墓と区分している。

4.3 河田浩二氏所蔵 耳形柄頭長剣の類似品

紺谷亮一氏は「形状、模様等から古代イランの物にまず間違いない。柄には美術館の物には無い斜めの模様が有り、刃、柄、柄頭を組み合わせる分割鑄造がなされているなど資料として極めて重要」と報告している。岡山県立図書館での文献調査では、中近東文化センター蔵(東京都三鷹市大沢 3-10-31)の「鉄芯青銅柄剣 ギーラーン 前2千年紀後半～前1千年紀前半 青銅 L65.5」が類似している。



中近東文化センター蔵 鉄芯青銅柄剣
ギーラーン 前2千年紀後半～前1千年紀前半 青銅 L65.5 cm

耳形柄頭長剣は主にタリシュ地方で発見されている。柄頭は半円形もしくは扇形の突起が2つ付いているのが特徴である。この形状はメソポタミアに分布している半円状突縁付柄剣の柄頭と酷似している。

5 岡山市立オリエント美術館の活動

5.1 古代イラン秘宝展 平成14年

古代イラン青銅器、特に剣において非常に興味深い事実を発見しました。今まで青銅製剣とされてきたものの柄部分に鉄芯が使われていたのです。このような銅と鉄を組み合わせる高度な技術はバイメタル技術と呼ばれます。これにともない鉄芯に関して化学的分析を行いました。興味深いのは軟鉄が使用されていたことです。さらに鉄成分中にアナトリア(トルコ)・ヒッタイト時代の鉄成分と類似した酸化化合物が含有されていることが判明しました。3千年前とは丁度、青銅器時代から鉄器時代への過渡期にあたります。しかしバイメタル技術はなぜか製鉄技術の故郷とされるヒッタイトでは確認されていません。どうしてイランにおいてのみバイメタル技術が発展するのでしょうか。また鉄芯使用にはどのような意味があるのでしょうか。機能的もしくは呪術的意味があったのでしょうか。



岡山市立オリエント美術館蔵 鉄芯青銅柄剣
北西イラン 前2千年紀後半～前1千年紀前半 青銅・鉄 L53.3cm

5.2「鉄芯入りの古代オリエントの青銅剣」JFE テクノリサーチ株式会社報告



紀元前1千年紀初頭イラン北西部のルリスタン地方で作られたとされる青銅剣の柄(つか)の芯に鉄が使われているのではないかとということで、岡山市立オリエント美術館殿から調査を依頼されました。工業用X線透過装置で観察したところ、青銅と鉄を使用して作られた柄の部分の状態が明らかになりました。写真1と2は、青銅製柄頭(つかがしら)の先端部の外れた青銅剣の外観です。写真3と4は柄部分のX線透過写真です。写真1, 2, 4で、柄の先端にわずかに突出した部分が見えますが、それが鉄芯です。写真3中の細かい筋が鉄芯と青銅の境界を示しています。柄の中心部全長にわたって鉄芯が入っているのが分かります。写真4から柄と刃の接合部に隙間が観測されます。また、青銅の刃を接合するために鉄を刃の周囲に回して装着している様子が分かります。柄と刃との接合方法についても現代の替え刃方式を先取りしていた感があります。鉄器時代初期に、これだけの技術があったのは、まさに驚嘆に値します。露出している鉄芯先端部を用いて化学成分分析、金属組織観察、硬度試験なども行いました。その結果、2種類の比較的純度の高い軟鉄で折り返し鍛錬されていること、また、鉄の中の介在物(不純物)は同時代のトルコ遺跡出土鉄器の介在物成分と類似していることなどが分かりました。

2001年11月に開催された「日本西アジア考古学会第3回公開セミナー」で、これらのことが発表1)されて大きな反響を呼びました。

6 まとめ

「タリシュのドルメン文化」に注目する理由は、カスピ海沿いのイラン西北部からカフカズの東南部にわたるタリシュ地方に、大きな塊石で作られ、上に大きな平石を天井板として乗せたドルメン形式の円形や矩形の墳墓が多数群在し、それらにはストーンサークルが伴い、そこから青銅や鉄の利器類他が出土しているからである。ゾロアスター教とストーンサークルに注目している。吉備国のストーンサークルは「楯築遺跡」に代表されるが、「高島にもストーンサークル」との藪田徳蔵氏説の説明があった。



楯築遺跡のストーンサークル

耳形柄頭長剣は高島迄、秦氏の渡来物として運ばれたものであろう。イランの古代史と日本の古代史の関連に注目したい。

7 参考文献

- ① 『青銅剣は3000年前のイラン製 極めて貴重』山陽新聞
- ② 『岡山・オリент美術館の青銅剣・柄の芯に鉄』山陽新聞 2001年11月1日
- ③ 『別冊歴史読本 歴代皇后人物系譜総覧』2002 新人物往来社
- ④ 『吉備(黄蕨)国・高嶋宮伝承の解析』丸谷憲二
- ⑤ 『岡山市立オリент美術館研究紀要 18』[2002.4] 21～29頁
「古代イランの青銅剣再考ー岡山市立オリент美術館所蔵・バイメタル剣」
- ⑥ 『川鉄テクノロジー社内報 KTEC News NO.56』2002 川鉄テクノロジー株式会社
- ⑦ JFEテクノロジー株式会社「鉄芯入りの古代オリエンの青銅剣」
http://www.jfe-tec.co.jp/jfetec-news/k_news/news/56.html
- ⑧ 「古代イランの青銅剣再考ー岡山市立オリент美術館所蔵バイメタル剣ー」『岡山市立オリент美術館研究紀要 Vo.18』21～30頁 岡山市立オリент美術館
- ⑨ 「銅の文明・鉄の文明への新提言ー岡山市立オリент美術館所蔵・ルリスタン青銅剣からー」紺谷亮一 2001 日本西アジア考古学会第3回公開セミナー要旨集 13～16頁
- ⑩ 『古代イラン秘宝展ー山岳に華開いた金属器文化ー』2002 岡山市立オリент美術館
- ⑪ 『広島大学考古学研究室』
http://home.hiroshima-u.ac.jp/kouko/museum/relics_assort/bimetal_wasia.html
- ⑫ 『栄光のペルシャ』編者 平山邦夫シルクロード美術館 古代オリエン博物館 2010 山川出版社
- ⑬ 『江上並夫文化史論集 6 文明の原点オリエン』江上並夫 2001 山川出版社



筆者(丸谷)と藪田さん自作の高島案内板 右端＝藪田さん

二千年の歴史、岡山の魅力

日本先史古代研究会会員 楠 敏 明

歴史の重み

「4,000年の人間の歴史の重みを感じて生きてくれ」と法学の最終講義で教授が話された。あれから半世紀近い。当時はその歴史を変えてやろうという心意気であったが、一人の力ではどうなるものでもない。いや、むしろ二千年の歴史が息づいている岡山に生まれたことを誇りにさえ思えるようになってきた。

国際協力事業団の仕事でバルカン半島にあるマケドニアのある都市へ行った時、案内の水道局長が「ここは第1次世界大戦の広島です」と説明された。第1次世界大戦はバルカン半島での1発の銃声が始まったと学校で習った。確かにその町は旧市街と新市街とがちぐはぐな感じがした。当時、私は広島に住んでいた。広島は原爆の被害から立ち上がる最中で、歴史を感じさせるものはほとんどない新しい街へ生まれ変わらざるをえなかった。旅をして、歴史を感じさせない町ほど味気ないものはない。

古里、岡山は人が生き返り、生まれ変わりして今日の姿をなしている。連綿として続いていることがあちこちで見られる。それがまさに歴史の重みである。

真っすぐな道はさみしい

山頭火の句に「まっすぐな道はさびしい」という自由律俳句がある。札幌の大通り、広島の平和大通りは真っすぐである。が、岡山の桃太郎大通りは少しづつ歪んで岡山駅から城下へ通じている。札幌の大通りは何も無い北の大地に作られた。広島の平和大通りは原爆で歴史を消された焼け野原に作られた。これに対し、桃太郎大通りは談合に談合を重ねて、四百年余をかけて出来上がった。そのため、すこし歪んでいる。そこに私は歴史を感じる。人の営みを感じる。

文化のない街づくり

新幹線で広島の街への入口でまず目に映るのは山肌を削ってできた墓地である。また、平和大通りにある白神神社の隣に20数階のホテルがあり、原爆ドームのすぐ近くにそれを見下ろすマンションが建てられようとしている。バイタリティーと見るべきか、生きんがための経済活動とみるべきか。神も原爆で倒れた御霊をも畏れない諸行というべきか。少なくとも岡山県人としては受け入れ難い状況である。広島は原爆投下により外から入ってきた人も多い。あるいは広島を古里にしない人達の仕業かもしれない。

かつて広島大学学長を務めた頼実先生に聞いたことがある。「岡山は史跡の保存とかにお金をかけるが、広島は都市計画で古い建物をすべて壊している。これは原爆を落とされたせいですか」と。すると、「岡山は戦前から文化的なものに金をかけ、広島はそうではなかった。」という返事が返ってきた。県民性というべきか、歴史の所産というべきか。

歴史に学ぶ、動、植物に学ぶ

最近、新しい商品開発において植物や動物に倣うことが一つの流行になりつつある。(バイオミクスリ、生物の模倣といわれている。) 動、植物は何万年、何百万年と生き続け、環境に適応して生き延びてきた。そして現在に至っている。それだけにいろいろの進化、適応が隠されている。それを新商品に

応用しようとしているいろいろ研究、開発が行われている。それをまねてできたのが撥水性のある衣服の開発であり、痛みの少ない注射針等である。万物の霊長といわれる人間が動物や植物にあるべき姿について教えを乞うという形になっている。

長い年月の風雪に耐えたものが現在に残っていると見るべきであろう。歴史を学ぶ原点はそこにある。

自己実現のできる町

人類も長い間、生きんがため、食わんがための労働を強いられてきた。わが国においても20世紀の後半になってやっと生活環境が豊かになり、なじまない労働をしいられることが少なくなる社会へとなりつつある。努力をすれば、自己実現がかない、それが生きがいとなりうる社会になりつつある。その自己実現ができる町こそが都市の魅力になりつつある。これからの街は自己実現ができやすい街か否かが魅力ある街の判断指標になるのではないか。それは子供にとっても成人、そして老人にとってもである。

岡山の魅力

街の魅力はなにであろうか。ビルが多いこと、ビルが高いことであろうか。私はしばしば都市の駅前に立ち降りて考える。少なくとも岡山の駅前には目を塞ぐビル群はない。これが岡山の魅力と私は考えている。文化を英語ではカルチャーという。カルチャーとは本来耕すという意味である。岡山は二千年をかけて人々が耕してきた結果が現在のありようである。それはビルが主役でなく、速さが主役でなく、効率が主役ではない。それが岡山である。のんびりとして、大陸的で、質素で、決して派手ではないが、それでいて耕されていると感じる、感じさせられる文化の香りがするのが郷土、岡山である。かつて、吉備の国と呼ばれていた地域のあちこちに数多くの遺跡、遺構があり、その雰囲気醸している。二千年をかけて営々と築き上げてきた先人たちの息づかいが感じられる。それこそが岡山の魅力と考える。



楯築遺跡にて 古代衣装で案内スタッフ一同 筆者は前列右から2人目
筆者は楯築遺跡のある集落に在住で遺跡の管理・整備等をなさっています。

九州説と畿内説の邪馬台国論を考える(1)

日本先史古代研究会会員 中島康之

(一)第一の不思議の扉＝「高天原」を思わせる地は筑後川上流の夜須郡

卑弥呼(天照大御神)の都した「高天ノ原」について考えてみよう。それを定めるには古事記上巻に記されている高天ノ原の環境を整理してみる。

- ① 高天ノ原には「天ノ安ノ河」が流れている。その河原には、多くの神々が集まって会議を開くことが出来た。即ち「天ノ安ノ河」は小さな河ではない。
- ② 田が在り、田には畦が在り溝が引かれていた。卑弥呼がその田の新穂を召し上がる祭殿もあった。又「天ノ真名井」と呼ばれる井戸が在り、馬や鶏もいた。すなわち平地が開けていた。
- ③ 「天ノ安ノ河」の河上には「天の岩屋」が在った。そして硬い石や、鉄(天の金山の鉄＝まがね)を採って来ることが出来た。更に「天の岩位＝イワクラ」＝磐座との言葉も表れる。すなわち河上には岩石の在る山があった。

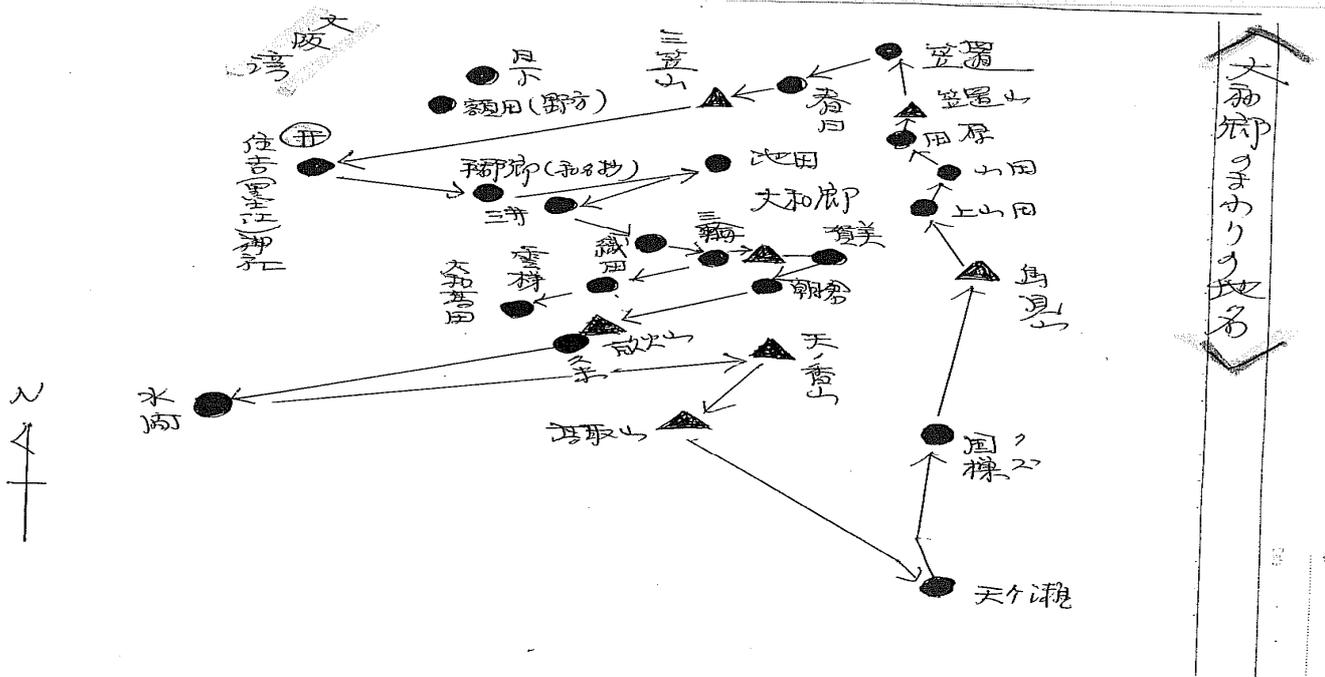
このように「高天ノ原」は著しい地上的特徴をもっている。これらの条件を満たす所を九州に求めることができる。九州に「ヤス」と呼ばれる河、又は、河の辺の地名で「ヤス」と呼ばれる所があるだろうか。……朝倉郡に夜須町と云う町が在る。甘木市の近くである。そしてその地は前述の①～③を満たしている。そして夜須町のすぐ近くを筑後川の支流が流れて居り、川の下流に向けて平野が広がり筑後平野に繋がっている。夜須町は北九州のほぼ中央に位置しており、川の上流には山々が並ぶ、そして夜須(安)川も流れてる。夜須町の「夜須」は日本書紀や万葉集では「安」と記されている。

(二)第二の不思議の扉＝日本神話にあらわれる香山も存在

古事記神話の主な舞台は出雲と九州で占めている。その九州に現在も神話に名の見える「安川」と同じ名の川が流れており「ヤス」の地名が残っている。しかしそれだけではない、「安川」によって不思議の第一の扉が開かれたとすれば「香山」によって不思議の第二の扉が開かれる。日本神話には「天の香山」、記紀では「香具山」は「香山」と記されている。この天の香山は「大和の天の香具山」と考えている人が多い。しかし「香山」と云う山は夜須町や甘木市の近くにも在る。神話の舞台が主に九州である事を考えれば、神話に表れる香山は九州の香山を指すと見るべきであろう。

夜須町や甘木市の東南にある香山は現在「高山」と書かれることが多い。しかし昔は「香山」と書かれた。大和の天の香具山も昔は「高山」と書かれたことがある事は、万葉集の「高山は畝火雄雄し……」etcと詠われている。

地名は時の流れにも滅せず、極めて残りやすいものである。延喜式卷第二十二を見れば、九州地方(西街道)の郡の名として、95郡名が記されている。その内現在も郡の名としてそのまま残っているのは、55郡在る。すなわち 60%近くは千余年以上の年月にもたえて残っているのである。また「生葉→浮葉 三毛→三池 築城→築上 伊作→伊佐の」ごとく、ごく僅かに変化したものや、昭和の代になって消滅した郡名、更に怡土郡と志麻郡が一緒になって糸島郡に、喜麻郡と穂浪郡が喜穂郡に、三根郡と養父郡と基肆(キイ)郡が一緒になって三養基郡に、飽田郡と託麻郡が一緒になって飽託郡になったように、延喜式の郡名を一部残している現代の郡名を加えるならば、95郡の内 71郡となり約 75%である。更に市町村名が残っているものを加えれば、95郡の内 80郡名が残っているのである。即ち約 84%となる。そして昭和になって消滅した地名も加えるならば、95郡の内、実に 90郡の 95%までもが千余年の年月に逆らって何等かの形



奈良県の大和郷の周りの地名

地名についてのこの事実は「邪馬台国東征説」を支持するものである。そして邪馬台国の領域は筑後川のはほぼ全域に及んでいたと考える。そうしなければ倭人伝の記するところの戸数七万余個を納める事は出来ない。大陸への通路である奴国や伊都国など玄海灘沿岸にも出やすく、かつ背後に筑後川流域の豊かな生産力と人的資源を擁する、甘木市夜須町の付近こそ女王国卑弥呼の住まいしていた場所として最適であったと考える。

(四)高天ノ原は北九州に在る

天照大御神はどこに居たのか……。古事記・日本書紀には天照御大神は「高天ノ原」に居たと書かれています。古事記の神話に出てくる地名の統計を取ったものは次の通りである。

- 西街道(九州地方) = 36ヶ(29.5%) 山陰道(山陰地方) = 34ヶ(27.9%)
- 南街道(四国・紀伊・淡路) = 13ヶ(10.6%) 畿内(大和・山城・河内・和泉・摂津) = 11ヶ(9%)
- 東山道(近江・美濃・飛騨・信濃・上野・陸奥・出羽) = 9ヶ(7.4%) 倭 = 5ヶ(3.3%)
- 北陸道 = 4ヶ(3.3%) 山陽道 = 4ヶ(3.3%) 東海道 = 3ヶ(2.5%)

古事記神話で圧倒的に多いのは、九州の地名そして出雲の地名であって、奈良大和の地名は極めて僅かである。畿内の地名は 11ヶしか出てこない。即ち古事記神話の主たる舞台は九州である。高天ノ原神話は大和朝廷の基となる勢力が、非常に古くは九州に居た時の事を伝承していると思われる。

しかも畿内 11ヶの地名もよく見ると、本当に畿内で生まれた地名かどうかは怪しい地名が殆どである。例えば「墨江」と云う地名が神話の中に出てくる。この「墨江」後に「住吉」という字を与えた。その為に今度は文字に引かれて「すみよし」と読むようになった。大阪には現在住吉区が在り住吉神社がある。古事記の神話に出てくる「墨江」はその事であると本居宣長は言っている。畿内地名の一つに統計として取られている住吉神社も福岡博多区に古くから在る神社である。

次号に続編の「間違いだらけの邪馬台国畿内説」を掲載します。力作ですご期待下さい。(編者より)

古代社会の大産業革命と異民族の融和

——水耕稲作乾田栽培方式——

——異民族の衝突日本列島では融和——

日本先史古代研究会会員 山崎泰二

(一)稲作の原産地はインドから始まった

稲は日本の在来種ではありません。一般の方は（戦後の学校教育では）稲作開始が弥生時代の始まりと教わりました。石の道具を使う先人が新石器時代を築き、狩猟（動物・植物）をしていたのが縄文人で、肉の煮炊きのために縄文土器が発生したと一般に教えられているのです。しかし最近の学者や専門家の定説は少し違うようです。

ノートルダム清心大の高橋護(まもる)名誉教授(岡山在住)らの研究が学会の定説になっていることを知りました。縄文時代(今から1万5000年の昔に1万3000年間続いた時代)の中頃には動物の狩猟・植物の採取から家畜の飼育、穀類の栽培が始まっているとのこと。青森の三内(さんだい)丸山縄文遺跡では、野生種の栗の中から粒の大きいものを選んで住居の近くで栽培し、集団で何代も定住していた様子が明らかになっています。縄文人は狩猟や、硬い果実(栗・どんぐり等)を採取し、川を遡上してくる鮭・鱒などを簡単な木弓や槍で捕っていたのです。塩分は生肉から得ていました。石器時代から面々と繋がっている縄文人も、元々大陸から移動してきた旧モンゴロイド人です。(旧モンゴロイドの発生地は現在のインドネシアを源郷にしたスンダランドより海洋・大陸を北上した) この地球の最後の氷河期が終わるのは1万年前ですが2万年以前は大陸と陸続きで、海面が今より130mも低かったそうです。瀬戸内海は草原でマンモスが生息していたのです。今でも底引き網漁業でマンモスの骨が揚がり話題になることがあります。人間も歩いて移住して来ました。氷河期以前から移住して来ていた旧モンゴロイドと、寒い氷河期を大陸で経験した新モンゴロイド人に外形の差は多少あっても同じ黄色人種です。新石器時代から住む原住民との合体が日本列島で縄文人として進化します。 **図-2 縄文系を参照 《第一の融和》**

彼等は大陸の穀物を持ち込みました(粟や稗)。特に稲・米は他の食材に比べて灰汁(アク)がなく美味しいことを知っていました。栽培は原則畑作＝陸稲で、なだらかで配水の良いやや傾斜した土地を選び焼畑農法で栽培を始めるのです。肥料分がなくなり、連作障害が出始めると移動して行きます。小動物の捕獲に犬などを使っていましたが収穫も限られていますから人口も当然少なく、動物性蛋白質は先に述べた通り河川を遡上する大型の鮭・鱒などが得やすい食べ物でした。一般に列島内における縄文人の分布は東北北陸地方が多いのです。その末流が青森の三内丸山遺跡でありアイヌの人々でありましょう。

稲作が発生したインドや東南アジアそして中国の揚子江流域では、水耕稲作の初期の姿が発生します。しかし大河の土地の排水は今でも克服されていません。粟・麦やトウモロコシより湿地に強い稲の栽培が進んだのです。同じ中国でも今の北京等の華北地方は現在でも畑作が中心です。ジャポニカ種の稲にも熱帯種と温帯種に分けられるようですが、日本には温帯タイプが定着しました。

(二)稲作の日本列島渡来

紀元前500年ごろの中国は、孔子が儒教を説いており、あの有名な万里の長城を秦の始皇帝が、北方騎馬民族の襲来にそなえるために、民衆を駆使して建設遂行中でした。大陸の戦乱は民衆を巻き込み、

敗北は民族の抹殺と奴隷としての悲惨な道しかないのです。始皇帝亡き後の三国史時代歴史書に登場する劉邦・項羽や軍師の諸葛孔明が活躍しました。当時の戦いは部将(軍隊)だけの戦いだけではありません、民族同士の闘いです。北方騎馬民族にやられた華北の漢民族は南部の華南地域の国々を襲います。弱い人民の多くは土地を捨て、決死の思いで海(東シナ海)に逃げます。竹筏(タケイカダ)を繋ぎ合わせた簡単な舟に帆と櫓で大陸棚を横切り、それを過ぎると暖流の北上する黒潮の大きな海流に乗ることが出来ます。当面の食材の稲米などを持参していました。雨水を飲料にしてしのぎます。先ず五島列島・九州島が漂流地です。緑の山が遠くに見え隠れし段々と近づくと、歓喜の思いで上陸。美味しい水を飲み、柔らかい果実を堪能し生きる希望が湧いて来ます。幸いにこの地は温暖でした。(五島列島では記紀に符合する史実の地が残っていて、その研究成果を「日本国家の起源・五島列島に実在した高天原」として松野尾辰五郎氏が発表された本を娘さんの村山三枝子氏＝岡山在住が再版されそれを拝読しました。稲作伝来と記紀が符号する貴重な資料です。) **図-1 日本近海海流図を参照**

先にも少し述べましたが稲は本来「連作」の出来ない代表的な穀物です。それを弥生人が水耕稲作乾田方式の栽培技術で連作可能な穀物に変えたのです。同じ米を畑で麦と同じように栽培すれば連作障害が現れるのです。新しい上流の水を田に供給すれば、水の中には豊富な栄養分と空気が含まれていて、まさに自然農法が確立していたのです。重要なのは稲の生育途中で完全に排水をして田の表面を乾燥させるタイミングを伴う技術であります。程よい落差があつて小区画の面積の田の方が、排水管理がしやすいのです。1粒の稲籾は約40株に殖えそれぞれに稲穂が付きます悪くて2500粒、良くて4000粒になることが景山詳弘(よしひろ)先生(岡大名誉教授)の自然農法の実証(平成22年)で確認されています。

彼等は三々五々上陸した大きな河口から配水の管理が容易な小さな小川の水辺を求めて遡上して行きます。程よい岸辺に畦を作り川の水を導入し、小さな区画は水の管理(給水・排水)が容易に出来るのです。持参した稲籾を蒔きます。半年もすれば稲穂が垂れてくるのです。日本列島の先住民である縄文人が、魚を捕獲するために川辺に来て、異人達(新渡来人)の様子を伺っています。収穫期の稲穂を見て驚きです。自分たちの焼畑で作る同じ稲が何倍もの収穫を同じところで得ているのです。羨望の眼差しで新渡来人の生活を覗き様子を観察しています。《**第二の融和**》

(三)外来人と在来人の平和的融和は世界史上特異なもの 高く評価すべき！！

世界の歴史の中で新渡来人と在来人が戦いをしないで融和したのは、この当時の日本列島の大きな特徴で高く評価されるべきです。新しい人種＝弥生人が誕生することになります。先に述べたように中国の江南地方の戦乱を回避して海に逃れ親潮の暖流に乗り日本列島に漂流した渡来人。大陸では本来、異民族と衝突すると、生きるか死ぬかの戦いが当然の時代です。漂着した避難民は少数で武器等は持っていません。裸一貫の無防備状況です。在来人の襲撃を受けますと一たまりもありません。殲滅の危機状態でした。 **図-2 江南系(稲作民族)を参照**

列島内での縄文人は西日本には分布も少なかったことや、生活の手段の場が違っていたこともありましたが、しかし最大の理由は先に述べた通り、縄文人も陸稲(おかぼ)で稲の栽培を既に行っていたこと。渡来人の新技术のレベルの高さに驚嘆し羨望の眼差しで見っていました。収穫は少なく移住を余儀なくされる焼畑農作より、小川の付近に定住して同じ場所で豊富な収穫のある水耕稲作は、現代人が電気を発明し自然界には存在しない原子力を、平和利用と称して発電に利用している今日の比ではありません。その証拠に原発はわずか50年で崩壊しましたが、水耕稲作はその後2500年後の今日まで続き、これからも益々重要な食の原点であります。

渡来した人々にも弱みがあります。東シナ海を渡って来た江南人は婦女子が極端に少なく屈強な男子

社会でした。在来人との融和は子孫を残す上でも必要なことです。幸い同じモンゴロイドの黄色人種です。言葉も自然に通じ合い、和合の度合いが益々増えます。稲の栽培方法は違っても、石包丁や土器・農具など穀物栽培に関して共通点も助けになりました。食べられる山野の果樹の実など、縄文人の生活の知恵はそのまま引き継がれました。

(四)当時の生活の様子(主に弥生時代)

稲＝米は他の食材に比べて保存可能で、2～3年の災害等で収穫が出来なくても再起が可能でした。食生活が充実しますと、自然に人口は増えます。共同作業をして耕地を拡大すれば成果も大きく、川上の小川の辺から始まった水田も段々と広がって、中流域に達します。給水・排水の利便には農業土木の技術の発展(農具の発展)が必要です。当時の日本列島で鉄は産出していませんが、部材として使った形跡が残っています。黒曜石のサヌカトなどの石器は隠岐や伊豆諸島から運ばれて広がっています。そろそろ金属加工(主に銅製品)の技術集団の発生を見る時代に入ります。

穀物を主に食材とするようになって、困るのはミネラル＝塩の補給です。海に近いと貝や海の魚から得られますが、山間部では不足しますし野生の狩猟も限られています。海で採れた海藻や魚介類を干物にして、米と交換する集団が発生します。製塩も専業として始まったようです。山間部では薪や炭を農閑期に作る光景は今日まで続いています。その炭は金属加工に必要でした。薪は製塩に欠かせません。

縄文・弥生の人々は私有の概念がありません。全て共同作業・共同生活です。海辺で魚介類を採取し生活は安全な高地で住居し集団で暮らしました。岡山県でも水島の種松山、児島の貝殻山には高地性集落や貝塚の跡が残っています。海の魚を捕らえるより浅瀬の海で貝類を捕獲する方が容易でした。貝塚の多いのもその辺の事情でしょう。余談ですが人間は素潜りで海中の中で目を開けても良く見えません。箱メガネなどの道具や潜水用具の発達が必要です。しかし鵜のように水中で潜水し魚を捕らえる鳥たちを身近に見ていました。鵜飼の始まりは以外に早く、記紀(古事記・日本書紀)の始めの段階にも出てきます。今日でも神聖化して宮内庁の管理のもと伝統漁法が伝わっています。当時の人間の観察力はすごいですね。

魏志倭人伝にも絹のことが出ています。生糸(養蚕)は5世紀に伝わったとされていますから弥生時代は絹の生産はありません。しかし栽培種の粟に巻きつく山繭の存在を彼等が見落す訳がありません。中国地方の山塊を散策していると、今でも山繭を見かけます。金糸は貴重でした卑弥呼が中国の魏王に献上したのは黄金に輝く金糸であったと想像しています。漆の採取も知っていたことでしょう。吉備の山間地には漆の木が多く自生しています。漆技術は中国より日本列島の方が1000年も早く縄文中期の遺物が出ています。

繊維質の多い麻や三桎(みつまた)・コウゾは今では和紙の材料ですが当時は、水にさらし柔らかくして布にしました。木綿(ゆう)と書きますが綿から採った糸で編んだ今日の木綿(もめん)ではありません。着物は当時機織が有りませんから当然女性らによる手織りでした。枝に縦糸をつなぎ睡でシャトルのように行き来して編み上げて行ったのです。今でも布の幅は女性の肩幅(3～40cm)と決まっています。女性は貫頭衣として、男性は横幅布衣として着用しました。獣の皮も重要な衣類でした。

住宅は竪穴式から高床式に徐々に変わります。穀類の保管には今も昔も鼠との戦いです。材料は近くの木材を使いました。中でも栽培種の栗材は重宝のようで縄文住居跡からも出土しています。実を食べ貯蔵穴に保管した貴重な食材は住居の柱になり薪や炭になりました。

この頃食卓に銘々皿が出るようになります。高杯(たかつき)(古代文字＝籩豆へんとう・たかつき)は古代には豆の文字をあてました。高杯の形が豆に似ているからでしょうか。豆は米などの外来種ではありません。

日本列島の在来種だと岡山大学の山本悦世教授に教わりました。豆は自分の力で栄養源の窒素を作り出す貴重な食材で、東京農大の小泉武夫名誉教授は「田圃で稲を作り、畦に植えた大豆が貴重な食材になった」「先人に学ぶべきだ」との説に敬服したものです。当時箸は使いません。手で食べていました。美味しいものが食卓に並びますと「指食が動く」と申します。今でも人指し指のことを「食指」と称しますと佐原真先生は話していました。「箸」は 8 世紀になり普及したようです。卑弥呼女王も手食でした。箸の持てない子供と同じですね。地球上には今でも手食の民族が残っているようです。

(五)稲の富が人口を増やす

生活が多様で豊かになりますと人口は当然増えます。先に見たように水耕稲作が進歩しますと、周辺の仕事が特化され専門化します。耕作地を増やすために丈夫な農具が必要です。硬い木材を石斧で加工していましたが、金属加工の技術が少しずつ入っていきます。当初は銅やその合金でしたが、大陸や朝鮮半島から鉄材が入ります。貴重な鉄材は再加工して何度も使いこなします。

余談になりますが、歴史区分をする時に世界史的には武器を中心に行います。石器・青銅器・鉄器・と続き今は原子爆弾の時代と称すべきでしょうか。日本では生活用品で表します。石器は同じですが縄文時代はあの炎形の縄文土器。弥生も弥生土器が東京文京区の東大農学部のある弥生町から出土した土器から命名され、続く古墳時代は祭祀の場でもある墓が世界的に見ても特異な形(前方後円墳)で 400 年間も続きました。後は政治の中心地＝都の場所が時代区分になっています。日本人は元来戦いを好みません。西洋人かぶれをした先の敗戦体験による反省から、新憲法で戦争を放棄し、軍隊をも持たず武器を作らないと宣言しました。今の政権は武器の製造と輸出を許可するそうです。

農耕中心の弥生人は、在来の縄文人と中国江南地方の流民の混血・和合によって日本列島を席卷して参ります。自然との共生による集団社会が想定できます。九州北部などでは環濠集落が発生します。共同作業をして自分たちの財産を守るにはある種の柵や濠が必要でした。学者によっては「弥生人は戦闘が好きで、余力が出来るると近隣の集落を攻めた」と説明しています。確かにその面も否定できませんが、岡山の地で古代吉備を想定する時そのようには見えません。集団としての帰属意識を高め、ある種の今の言葉で「宗教的」な祭祀が始まったと見るべきでしょう。余力を戦闘ではなく、新しい祭祀へ集結したと考えます。

私は稲作生産の余剰力は他の物資との交換・交易に使われたと思うのです。物資だけではありません当時の文化情報も相当に進化していました。紀元前 500 年前後に中国で発生した道教が鬼道の形で日本列島に弥生の中期～後期には入ってきています。魏志倭人伝の卑弥呼の件(くだん)は有名です。その道教は日本社会に深化し、神事・仏事と合体し今なお我々の生活の中に生き付いているのです。今年は十二支の龍(辰)年です。これも当(まさ)に道教の世界なのです。特に道教は自然との共生による世界観でした。弥生社会には大切なことです。自然崇拜から先祖崇拜。そして情報物資の交流・交易が当時の人々の関心ごとだったのです。もう少し掘り下げてみましょう。

(六)弥生時代の祭祀

先にも述べましたが農耕を中心とした小集落の弥生社会にとって一番重要なのは、太陽や雨風の自然現象です。弱い人間の力ではどうすることも出来ない自然との共生は、先人の知恵の継承が大切で、そうした知恵の保有者が集落の中心人物として尊敬されました。最も良く知られているのが日本特有の銅鐸です。一般に祭祀に使われたと説明されていますが、当時大切な金属を農具や武器ではなく祭祀に使ったことが重要な意味を持ちます。(大陸では主に武器に使った)一般に銅鐸は後に大和と称される畿内地方

を中心に山陰地方まで広く分布しています。どうした訳か九州では殆ど出土していないのに、鑄型だけは九州で出ているのです。銅鐸は中国江南地方の銅鼓(どうこ)が原点との説もあります。稲文化と共に伝来したのでしょうか。

元々金属加工技術の発達をしていたのは、朝鮮半島南部と同族の倭族が九州島北部・隠岐出雲一帯で、九州で創られた銅鐸は出雲で量産されそれが畿内まで波及したと考えてみるとその方が自然と思えます。対馬海流に乗ると能登半島・若狭湾は近く、琵琶湖を経由すれば以外に畿内には短期間で交流が出来ます。銅鐸を用いて集落でどのような祭祀が行われていたのか、学者ははっきりと示してくれません。

平成8年(1996)島根の加茂岩倉で農道建設中に偶然に39個が纏まって発見されました。直後に私も現地に伺いまだ作業車などが乱雑していて生々しい山肌に接したことがあります。すぐ向かいの山の中腹には大きな岩が乗り出していて、昔から神秘的な場所、磐座(いわくら)として今日まで崇拜され地名も岩倉として残っているくらいです。一説によりますと「ヤマト勢力等の外圧に周辺の三十九の国々(集落)の首長が集まって、銅鐸を埋蔵し外敵から略奪されるのを守った」とも考えられます。弥生時代末期には出雲固有の文化(四隅突出墳丘墓)が突然消えて畿内のヤマト式の文化が進展するタイミングです。魏志倭人伝で邪馬台国に卑弥呼女王がおり、吉備楯築遺跡では大型の祭祀用墳丘墓が新しく建造中でした。出雲の加茂岩倉に近い荒神谷遺跡からは銅剣358本銅鐸6個銅矛16本等青銅器が大量に発見されました。昭和59年(1984)のことです。当時の出雲が九州の銅矛文化に劣らない金属加工の先進地であり、技術を持たないヤマト勢力から見ると喉から手の出るほど欲しい集団でした。記紀でも出雲を脅したり、褒めたり柔和策を講じます。吉備や筑紫の前に、出雲を味方に入れるのですが……。当時の畿内は日本列島の中で遅れていた地域でした。

北部九州では百あまりの国々が争っていたと倭人伝で伝えていて、それまでの銅鐸を全て銅剣・銅矛に鑄なおしたため、九州での銅鐸の出土が少なく銅剣・銅矛の進展地になったとの説があります。確かにそうかも知れませんが、銅剣の殺傷力は疑いものです。それよりも銅鐸に代わって祭祀に用いられた新式の祭祀用具と考えてみると理解しやすいと思います。

九州は佐賀の吉野ヶ里遺跡でお解かりの通り、環濠集落を形成し墓は甕棺式で埋葬しますが一部に特別な墓も存在します。弥生の初期に中国の江南地区から漂流してきた農耕民の姿ではなく、華北の魏国と交流し次の世代を構成する新しい息吹を感じます。金属加工技術は列島の中で一番進歩していましたし、中国との交易権も保持していて単なる農耕民の姿ではありません。出雲も先に述べたように四隅突出墳丘墓を有する特異な祭祀を形成していました。吉備はそれらの各地方の文化を術からず吸収、特殊器台を用いた双方円墳(前方後円墳の直前の原型)で自分たちの氏族のトップを崇める吉備固有の祭祀を確立します。祖先崇拜から首長崇拜の新しい文化が発生していたのです。

(七)騎馬民族との合体 海人族の活躍 新しい国体の発生

集団(国々)を具体的に引っ張って行く能力を持った指導者が必要とされました。これまで多くの説明は江南地方を源とする稲作文化・海上から神々が到来したとする祖霊信仰を持った農耕民を描いてきましたが、弥生の末期になると中国を統一した華北の魏国と交流し、朝鮮半島から騎馬系民族の文物が入ってまいります。騎馬民族特有の下辺の短い木弓のことが倭人伝に出ています。騎馬民族特有の弓を卑弥呼たちは既に使っていたのです。季節によって位置が変わる太陽ではなく、北極星を中心とする星座の知恵が迷える農民を救いました。草原を駆け回る高天ノ原の世界は新しい夜明けを意味します。邪馬台国の指導者にこれら騎馬民族の風俗など共通する点が多く出てまいります。

隣国中国も国体が変わり(西暦265年に魏が滅亡)朝鮮半島も激動の時代です。魏国との交流をしてい

た九州族は勢力のバックアップを失います。畿内を中心とする勢力が吉備の新しい思想と融和し、大国出雲を傘下におさめ、外国との交流権を駆使するために、在来の有力な海人(かいじん=あま)を傘下に抑えます。彼等は交易を通して情報・文化を先取りしていました。記紀の初期の内容は騎馬民族や海人達の活躍を生き生きと描いているのです。天(あま)=海(あま)と程よい結びつきをして、先住民の農耕民族=弥生人と、ここでも素晴らしい融合をしているのです。形の上では前方後円墳式の祭祀を行い、日本固有の鏡を用い道教・儒教・天道の思想で大陸とは一味違う国体が造成されます。騎馬民族が日本列島に弥生末期に到来し農耕民族である弥生人とうまく融和した傍証はいくらでもあります。記紀には海人系神話と騎馬系神話を随所に取り混ぜていて一方的にどちらかが優位な形で支配した形跡を消しているのです。

図-2 北方系騎馬民族を参照 《第三の融和》

平成 23 年のNHKの朝ドラは「おひさま」でした。信州(長野)安曇野(あづみの)が舞台で、主人公の陽子の清楚な姿と犀川の支流安曇野川の清流がとても印象的でした。この安曇は古代海人族の代表格です。筑紫に想定される「天の高天ノ原・天の安川」付近の地名が信州の安曇一帯に広がっています。穂高・有明・筑摩・犀川などがそうですし、(高千穂)穂高神社も存在します。安曇族の本拠地は福岡県の志賀島とされ、多くの海人族の統括集団であり、記紀に登場し後の王家(天皇)に近い有力古代氏族として成長します。後の王家になる騎馬民族は列島支配に海上権を持つ海人族をうまく利用したのです。九州・出雲・吉備の持つ制海権を安曇族にとって変わらせる秘策がありました。**図-3 3世紀の東アジアを参照**

古墳時代を経てヤマトの国体は列強に伍す程の力量に発展します。吉備は重要な役割を果たした痕跡が多く残っています。歴史は面白い。楽しみながら学びを深めて参りましょう。

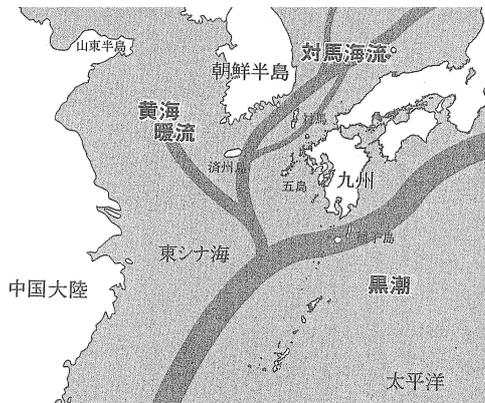
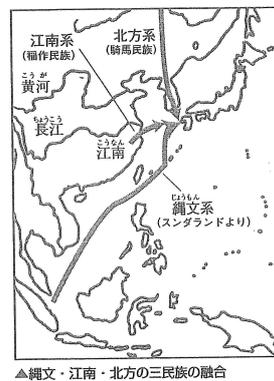


図-1 海流



▲縄文・江南・北方の三民族の融合

図-2 三民族の融合



▲3世紀の東アジア

図-3 邪馬台国 卑弥呼の時代

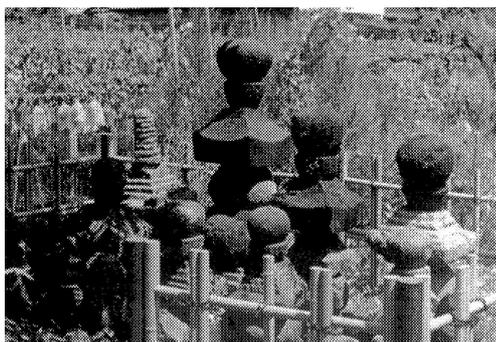
信濃から西国に下った井上氏族

日本先史古代研究会会員 井上秀男

(一) 井上氏(うじ)発祥地を尋ねて

私の先祖は信濃国(長野県)高井郡井上村が発祥地と伝承されている。清和源氏で源頼信の三男の頼季が井上氏を称したのが始まりである。姓氏辞典尊卑分脈寛永系図等の姓氏文献にも、井上三郎頼季=住信濃国、従五位下、掃部助、號乙葉三郎としている。井上一族から出た姓は乙葉・時田・矢井守桑洞・小阪・高梨・仁科・村上・芳美・安木田・佐久・米持氏等の諸氏が出ている。

今から6年前の平成18年8月に同郷の有志6名で「井上氏発祥の地」の長野県高井郡井上村(現在は長野県須坂市井上)を尋ねる話になって、前もって須坂市の教育委員会に問い合わせた。郷土史研究家の神林信雄氏を紹介してもらい、連絡を取り長野県須坂市へ車で高速道を走って10時間以上、須坂ICで降りて神林さんと待ち合わせて合流し須坂市の郷土資料を参考に歴史探訪してもらった。井上村の井上城、井上氏館跡、井上氏の墓地、小阪神社などの説明を受け案内をして頂いた。井上氏墓地には五輪塔や宝篋印塔が集められていた。井上一族、その家臣達の墓だろうと話されていた。鎌倉～室町時代頃のものと思われた。



同所 井上氏一族の五輪塔群



長野県須坂市井上村の井上城址

長野県から帰って1ヶ月後に「須高」(スコウ)という一冊の機関紙を届けて戴いた。この機関紙は郷土史研究家の神林さん達の須高郷土史研究会が発行しているもので、その中の囲み記事である「回覧板」の中に、私たちが須坂市を訪れた時のことを「岡山県より井上氏墳墓の地を尋ねて」と題して、私の持参した「井上氏先祖碑」(昭和52年1977年に父井上賀弥太らが建立したもの)の写真を紙面に紹介してくれていたのです。

下の写真は建立当日筆者が写したもの



その後須高21号(昭和60年9月15日発行)の文章に、片山正行氏の執筆による「頼季流井上氏の

西国展開」と題した内容のもの、須高9号(昭和54年7月1日発行)の中には「郷土美作国と井上氏」と題して岡山県勝田町の井上四男氏の執筆された本を送付してもらった。信濃高井郡井上村から発祥した井上一族が美作地方に来る動向について触れておられた。勝田郡勝田町の井上氏は三星城の後藤基氏に帰属していた私の先祖と同じであることも解ったのである。頼季流の井上氏は承久の乱で京方に属して西国に移って来た。そして分布している地域は、播磨・丹波・備前・美作に多く見られる。また頼季から出た井上九郎光盛を祖先としている井上氏も見られる。光盛は千曲川横田河原合戦で平家の大軍を破ったことで有名で源平盛衰記に見られる。木曾義仲の西上の養和の乱(1181)の頃から義仲と共に西国の地方へと移った井上一族が、播磨の地方にて時代の動乱の中で色々な諸氏と混合されながら各地方へ分布して行ったのであろう。

(二) 木曾義仲と信濃武士

木曾義仲は源義朝の弟義賢の子で義賢は武蔵国大蔵館(現在の埼玉県比企郡菅谷村)に館を構えていた。木曾義仲2才の時に義賢が甥の悪源太義平に殺害され、義仲は乳母の夫中原兼遠が抱いて木曾谷に逃げてその地で成長したと伝えられている。木曾義仲は治承4年(1180)4月9日以仁(もちひと)王(後白河法皇の二男)の令旨を受けて、平氏討伐の兵を挙げた。この頃信濃源氏の武士な大部分が義仲に応じ、井上氏等も戦いに参加したと思われる。それは義仲が八幡太郎義家の血を引き一つの源氏という流れを通じて血統的な誉れを感じていたのだろう。義仲の味方となった東信濃の諸氏の中には滋野系としようする、八島氏、落合氏、海野氏、望月氏、桜井氏、根井氏等の諸氏が見受けられる。

養和元年(1182)義仲が平家討伐の軍を起こした頃で根井太郎を越前に送って平通盛を水津に破るなどして、翌年の寿永2年(1183)7月28日平家を追って入京し実権を握るに至ったが、以仁王の子北陸宮を擁立しようとして公家たちの反対にあたり、粗暴な振舞等をして後白河法皇と仲が悪くなり、義仲が平氏を西征して備前で大敗すると後白河法皇は、源頼朝に木曾義仲を追討の院宣を下し源範頼・義経の西上軍と宇治勢多で戦ったが破れ近江粟津で元暦元年(1184)1月敗死した。

義仲に従って戦った北信濃源氏の井上、高梨氏等も寿永3年(1184)正月に義仲の首と一緒に京都七条河原に吊るされたと「醍醐雑記」に見えている。また同年7月10日に井上太郎光盛が駿河国蒲原駅にて殺されるなどした。木曾義仲没後信濃国には守護として比企一族が表面に出てくる。

(三) 比企(ひき)氏の興亡と承久の乱

鎌倉二代将軍源頼家の妻は比企能員の娘で若狭局といって頼家と若狭局の間に一男があり名前を一幡と名乗った。そのような関係で比企一族は強い勢力を誇示する様になり、頼朝譜代の重臣の中には比企氏を不快に思うものも出てきて、北条時政や源頼家の母政子も同様であった。このような機運の高まる頃の建仁3年(1203)頼家が病気になり生命が危なくなった時に、北条氏将軍家の所領地の分配を頼家万一の時には、関東二十八ヶ国を長子の一幡に、関西三十八ヶ国を頼家の弟千幡(せんまん=実朝)に与えるとの方針に決定したので比企能員は不満をもち、北条氏を打倒する計画をしたが、北条方でも比企能員を倒す計画をして北条時政は幕府の参謀大江広元と相談し比企能員の討伐に決心し謀略を考え、北条の館にて薬師如来像の開眼供養を寿福寺の栄西を導師として執り行うこととして、比企能員をこの席に招待し殺害しようと計画し北条時政は工藤五郎を使者に送り、その結果能員は少数の家来と共にその場所にやって来たところを、北条方の武将達によって殺害された。

それを知った能員の子、宗員は一族と共に頼家の長子一幡を奉じて小御所に立て籠もった為に北条時政は比企追討の軍を向けた、それに参加した武将には畠山重忠、三浦義村、小山朝政、同政宗、和

田義盛、結城朝光等の諸氏であった。比企一族は北条の諸将と戦った後に火を放って自害して果てた。一幡も炎の中に幼い命を落とした。建仁3年(1203)9月2日の事であった。俗に比企氏の乱のことである。比企氏没後は北条氏が信濃守護として支配する。そして信濃武士の多くは北条氏の支配下になった。

後に承久の乱(1221)が起こった時には、信濃武士の多くは幕府方と北条方に分かれて戦った。この時京方に属した信濃武士の中には北条氏に対する反感から承久の乱に京方に味方する者達がいたという。承久の乱後の新保地頭として多くの信濃武士が西国方面に移住していく。その場所は播磨・丹波・安芸・美作・筑前等の各地へ信濃源氏頼季流の井上氏が分布している。

私の先祖の伝承によると承久の乱の後、西国に移住したと伝えられ播磨の地に住して赤松氏に属したものである。兵庫県赤穂郡上郡町苔縄の法雲寺の諸家大系図の中に井上氏が数多く見受けられる。承久の乱(1221)後中央での状況は、公家の勢力は衰え鎌倉幕府は執権政治(北条)を確立したがその中で武士達(地頭)の勢力が強くなって来る。文永の役(1274)弘安の役(1281)が起こって幕府は財政面で苦しくなり、対策も効を奏せず結果的に執権政治の基盤が崩れてきた。その様な状況の中で後醍醐天皇は一部の武士を見方にして北条氏を倒し建武の親政を行ったが、これも公家中心に運営されて、武士達が不満を持ち反乱に立ち上がり、足利尊氏は後醍醐天皇を吉野の地に追い、北朝を立て自ら征夷大將軍となり室町幕府を開いた。その後約60年間南北朝の対立が続いた後に南北朝合体となって一時期は平安を保つが、次第に各地の守護大名が互いに対立を始め、細川勝元と山名持豊が対立し、他の守護大名の争いが混同し全国の守護大名が両軍に分かれて大きな戦に発展して、応仁の乱にいたって11年間も騒乱が続く。その後は戦国時代の世へと移る。

(四) 播磨国 赤松氏の動向

赤松氏は播磨国を代表する武将で村上天皇の後裔と称されている。建武3年(1336)に赤松則村が北軍(幕府軍)として天皇方の新田義貞を迎え討つ為に、播州白旗城(兵庫県赤穂郡上郡町)を本拠地とした延文元年(1356)播磨守護赤松則村の次男範資が美作守護に貞治3年(1364)則村の三男赤松則祐が播磨と備前の守護職に任ぜられ、備前国と赤松氏との関係が始まった。赤松則祐の跡を継いだのは赤松義則であり、義則は播磨・備前両国の守護職を継承するのである。

明德2年(1391)に山名氏清が室町幕府に叛旗をひるがえすと、義則は一族を連れて幕府方に参陣した。明德の乱である。軍功を挙げた義則は山名義理の保持していた美作守護に任じられ、赤松は播磨・備前・美作の三ヶ国に守護職を保持した。赤松義則は室町幕府の重鎮として活躍をしたが応永34年(1427)70才で没している。義則の跡を継承したのが満祐である。足利義教(6代將軍)の政治に不安を持ち嘉吉元年(1441)に満祐の自宅(西洞院二条)に招いて謀殺した「嘉吉の変」である。その後幕府軍が播磨国へ進軍して来て赤松満祐と弟の義雅と共に自刃して果てた。赤松満祐没後、赤松諸流も次々と討伐され甥の時勝は早世し、時勝の子息政則がいたが、応仁文明の乱の時には細川勝元の東軍に属して戦ったが、その後は衰退の道を歩む。播磨国の赤松氏は南北朝から室町時代、備前美作播磨の守護職として活躍したのであるが、次の勢力が浦上氏に推移していくのである。

(五) 東備前・西播磨・美作における浦上氏の動向

浦上氏が赤松氏と主従的な被官関係を持つようになったのは、南北朝時代になってからと云われ赤松が則村(円心)以来足利政権のもとで守護大名の地位をかくりつしてゆく過程で浦上氏も有力な守護被官の一人としてその勢力を伸ばして来たのである。特に赤松則村の子、則祐の時代貞治年間(1365～)播磨守護に加えて備前守護の職が付与された時、浦上行景が始めて備前守護代に任ぜられて以

降南北朝時代を通して浦上宗隆、助景等浦上一族が備前守護代となり、備前内の和気郡三石、邑久郡福岡に居城を構えるようになって浦上の勢力圏は、西播磨の本貫地から備前地方に伸びてゆく。

南北朝時代の職を引き継いだことで在地との結びつきを深め備前国と浦上氏の関係が強固となったのは、応仁前後の頃の浦上則宗の頃であった。浦上則宗は嘉吉元年(1441)嘉吉の乱によって一時没落した守護赤松家が、長禄2年(1458)三種神器を南朝方から奪回した功で、足利幕府からお家再興をゆるされて以来幼主赤松政則を補佐し、赤松家を嘉吉の乱以前の播磨、備前、美作の三国守護として再興するために尽力を注いだ人物であったと言われている。

次の浦上宗助は備前守護代として三石城(備前市三石)を本拠地として宇喜多能家らと西備前への勢力の拡大を進めていた。浦上宗助の息子村宗の時には浦上氏の勢力は主家の赤松氏を上回って永正15年(1518)ころには守護赤松義村と守護代浦上村宗の対立が完全に表面化して、赤松義村は本城である播磨の置塩城(飾磨郡夢前町)を出陣して浦上村宗の三石城を何度も攻撃したが失敗した。その後浦上村宗は備前・美作を支配していた赤松義村を大永元年(1521)播磨室津にて殺害した(下克上)。義村の子供晴政は置塩城にて備前・播磨・美作の守護として地位を保っていたが、最早や形式的な存在でしかなかった。

そして赤松氏に代わって戦国大名として浦上氏が東備前、美作、西播磨の地域を勢力下に治めるようになってきた。浦上村宗は幕府の所司代にも成ったが、幕府の管領細川高国と結び各地に転戦中享禄4年(1531)6月摂津の天王寺合戦において討死した。村宗の後嫡子浦上政宗は播磨室津城に居り次子の浦上宗景は備前国東部の有力地侍を味方に天神山城(和気郡佐伯町田土、岩土)に室津から移って居城とする。

(六)浦上氏から宇喜多氏への動向

浦上宗景は兄の政宗との間に不和を生じるようになって、争いあう状況の中で兄の政宗は赤松氏の残党にとって討たれる。赤松氏に属していた配下の者たちは天神山城の宗景に身を寄せる者もいたという。この頃我が家の伝承によると井上六郎家信は、室津に住んでいた時は赤松氏に仕えていたが、赤松氏衰退の後天神山城主浦上宗景に仕えたと記してある。井上六郎家信は天正11年(1583)4月5日没法名は常悦、妻は備前国大中山衣笠山城主中山五郎左衛門光能の娘と記している。中山五郎左衛門も浦上宗景に従っていた一人であった。

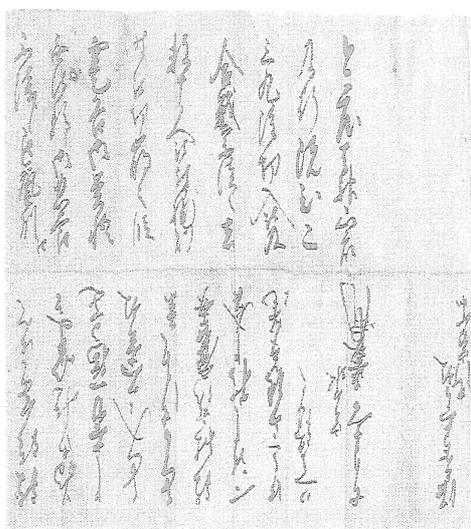
天神山城は美作から備前東部を南下し県下の三大河川の吉井川中流の左岸に位置し険しい岩肌を見せる山城である。自然の要害を備えた天神山城にも下剋上の波紋が迫ってくる。各地の有力な戦国大名が勢力を伸ばし美作地方には天文の頃から尼子氏の進出があり天文21年(1552)に尼子晴久は將軍足利義輝から伯耆、出雲、美作、因幡、備前、備中、備後の七ヶ国の守護に補せられていたので天文年間の美作に於いては、浦上氏と尼子氏が勢力を争う状況であった。永禄の初頭から西方から毛利氏の勢力が備中にも伸び、尼子氏の衰退にともなって、備中から美作地方に進出して浦上氏の勢力と争う様になり、備前地方では永禄の頃から浦上宗景の家臣であった、宇喜多直家が勢力を増して来る。

宇喜多氏は備前国邑久郡邑久郷(岡山県邑久郡)を本貫地とする土豪で宇喜多氏が備前の守護代浦上氏の有力な武将としてくるのは宇喜多能家からで、能家は浦上村宗に仕えていたが攝津の天王寺で村宗が討死したのち邑久郡豊原庄の砥石城に隠退していたが、天文3年(1534)6月30日浦上氏の部将の島村豊後守に攻められて自刃し果てた。能家の死後宇喜多氏は一時期衰えていたが能家の孫直家の時になって勢力を伸ばすようになって来る。宇喜多直家が表面化するのは天文12年(1543)浦上宗景に仕えた頃から始まり、天文13年邑久郡乙子城主となり、永禄2年(1559)に浦上の部将で祖父能

家の仇であった島村豊後守が上道郡沼城主であった中山備中守と内応して浦上宗景に叛意を持った為、宇喜多直家は浦上宗景の命をうけて、島村・中山両氏を討取り、この頃に本拠を沼城(亀山城)に移し、上道郡一帯を支配下に治めるように至ったが、依然として東部備前地方は主君浦上宗景が勢力を保持していた。しかし宇喜多直家は徐々に主君浦上宗景の天神山城を謀略をめぐらして攻略するのである。

(七)文献から見た和気郡天神山落城年月日について

世に言う戦国時代(天文・天正年間)この岡山(備前・備中・美作)に於いても有力な豪族の進出によって下剋上の世の中が展開される。軍記物語等に書かれている天神山の浦上宗景についても、和気郡誌、和気の歴史、吉備群書集成(巻3巻)天神山落城記、その他の文献に見られる。備前軍記等もそうである。これらの諸書には天神山落城の年月日が天正5年(1557)8月となっている。私も諸本を見てその様に思っていた。しかし数年前「熊山町史調査報告書四」平成4年3月号(熊山町史編纂委員会)発行の中に「新出沼元家文書」から見た沼元氏の性格と題して広島大学文学部教授文学博士の岸田裕之先生の執筆された文章の中に、山口県の旧家八木・香川家から発見された、宇喜多直家が戦国時代末頃天正3年(1555)頃に直家麾下(きか)に属していた沼元新右衛門尉に関わる直家の書状として紹介されている。その文書の中には和気郡天神山城合戦の様子が文書として書かれ、天神山落城は天正5年8月ではなく実は天正3年(1555)9月頃と見るのが正しいのではとの見解の文面です。



図版5 宇喜多直家書状

一 宇喜多直家書状(折紙)
 今度天神山衆及行、既至二三九離切入、被及合戦、宗徒之者數十人被討捕、則時被切崩之段、寔各御覚悟無比類御忠節不浅候、即芸州江致註進候、先々為御悦、以使者申候、太刀一腰、馬一疋進入候、久松殿近日御下之条、致披露、褒美可被申候、猶申合口上、不能多筆候、恐々謹言、
 七月十一日
 宇喜多直家(花押)
 沼元与太郎殿
 御宿所

註 この書状は、沼元与太郎が浦上宗景麾下の天神山衆と合戦し、主だった者を討取るなど戦果をあげたことについて、宇喜多直家がそれを毛利氏に進註し、自らは使者を送って褒賞したものである。
 久松殿とは、宇喜多直家が岡山に招き、浦上氏の正統と称して浦上宗景に対抗した浦上久松(宗景の兄政宗の孫)のことである。

直家の書状 半紙=折り紙

解説文書

この書状は沼元与太郎が浦上宗景麾下の天神山衆と合戦し、主だった者を討取るなど戦果を挙げたことについて、宇喜多直家がそれを毛利氏に進註し、直家は使者を送って賞賛した文章で、文面の中、久松殿とあるのは、直家が浦上氏の正統として宗景の兄の政宗の孫である浦上久松のことである。沼元氏の拠っていたのは小松城と見え(現在の久米郡久米南町下二ヶ)。また天正2年(1574)3月13日の原田三河守、原田三郎左エ門尉(久米郡中央町原田を本拠地とする稻荷山城の領主)宛て宇喜多直家起請文に浦上氏と戦った文面が紹介されている。

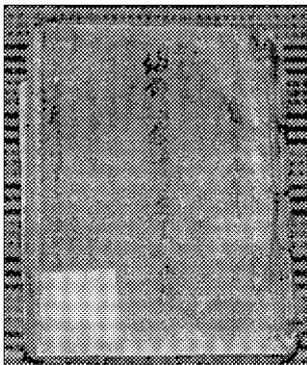
(八)天神山城落城後の美作国井上氏の動向

浦上宗景の居城は宇喜多直家の軍勢によって落城(宗景一代)45年間の居城であった。落城の節に少数の家臣達と共に播磨に落ち逃げて、のちに九州の黒田孝高に身を寄せたとの説もある。宗景の配下の者たちも各地方に流浪の身となり落ちて行った。その節に私の先祖の井上一族も例外ではなかった。井上六郎家信に4人の子供があつて、長男井上山兵衛尉政家(英田郡美作町阿蘇の井上氏祖)二男井上次郎三郎源政康(赤磐市是里物理)の井上氏祖で浦上宗景の景の一字を賜つて政景とも名乗つた。三男井上新兵衛政重(英田郡美作町海内)井上氏祖、四男井上又八郎政信(英田郡美作町下倉敷)の井上氏祖があつて、その地で今日まで続いている。

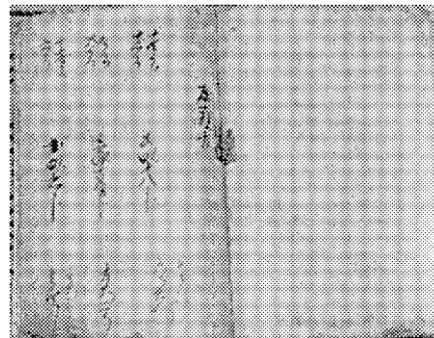
私の祖先は井上次郎三郎源政景であり、妻は英田郡河合郷の城尾城主渋谷権之丞国重の娘千代姫で浦上宗景の末子の太郎三郎君の乳母と伝えられ、のちに名前を改めて千歳(ちとせ)と名乗る。墓は私の家の裏の畑の中に自然石で祭られ劔の御霊(つるぎのみさき)と称されている。法名は妙得尼である。天神山落城後、数年は流浪の身として各地を転居した中で、美作の地で三星城主の後藤勝基の配下として井上一族が居たので頼って行き後藤氏の配下としていたが、後藤氏も浦上宗景を主君としていたので、三星山城にも宇喜多直家の勢力が伸びて宇喜多家の部将の花房助兵衛・延原弾正等の攻撃によってついに天正7年(1579)5月三星城は落城し後藤氏は滅亡するのである。

三星城落城の様子を記したものに、吉備群書集成の三巻の中に「三星軍伝記」として書かれている。その合戦の文面の中に「弟の井上次郎三郎を呼び出して兄井上山兵衛尉政家の手傷の様子を尋ねさせる云々……」と記された箇所がある三星合戦後は民家に潜居し。井上次郎三郎源政康の子供の井上次郎右衛門政隆の頃には、関が原の合戦も終わって徳川時代になり、人里離れた地を求めて赤磐市是里字物理の地に帰農するのである。

公文書の畠方備前国赤坂郡是里御検地帳、慶長9年(1604)の中に屋敷方として五畝十八歩、もどろい二郎右衛門と記録されている。井上次郎右衛門政隆から私(筆者)で16代である。



備前国赤坂郡是里御検地帳 表紙



もどろい二郎右衛門の屋敷方として

五畝十八歩の記載箇所

天神山落城400年記念として昭和52年井上一族一同の協賛によって「井上氏先祖碑」の建立することが出来た。(写真21P参照)もうあれから38年の月日が流れた。私も幼少のころから年1回春3月井上一族の老いも若きも集って、井上先祖祭を続けてきた。今から6年前に有志で井上氏発祥の地を訪れ井上氏の歴史について改めて知ることが出来た。今では田舎の人達も人数が少なくなっているが、井上先祖祭は続いている。山村の小さな「絆」である。故郷の家からは遠望ではあるが天神山城の峰を望むことが出来る。今から400年前に先祖のいた天神山を望める場所に居住した先祖の配慮に触れた時、何か心に暖かいものを感じさせられるのである。

連載＝四国八十八ヵ所めぐり「歩き遍路の旅」 3

日本先史古代研究会 会員 樋口俊介

発心の道場(阿波の国) その3

「1番(霊山寺)～23番(薬王寺)」合計23ヶ寺(徳島県)

発心(ほっしん)とは、四国霊場巡拝を志すこと。はるか彼方に向かって
1200Km あまりの辺路(へち)の旅へ、皆様をご案内いたします。
当日に歩くお寺に関する由来とか伝説等の内容を分かる範囲で説明をします。
これからが修行のスタートです。必ず最後まで歩き通します。

第5回目＝平成20年9月6日(土)鮎喰川の清流に沿って歩く

歩き(ウォーキング)遍路 札所0ヵ所 約16Km

前回歩き終えた12番から13番(大日寺)へ22Kmのうち今日の予定(16Km)を歩く、玉ヶ峠を上り下って福原を通り、鮎喰川に沿って歩き阿川橋までひたすらに歩き続ける。大日寺は弘法大師が開かれたお寺です。

弘法大師が弘仁6年(815)にこの地を巡っていた際に、鮎喰川の対岸にある「大師ヶ森」で護摩の修法をしていた。その時に大日如来があらわれたので、大師は大日如来の像を刻んで本尊としてお堂を建立したといわれている。しかし、この大日寺の本尊は大日如来でなく、十一面観音像。四国八十八ヶ所には4番札所と28番札所にも「大日寺」があるのだが、そちらは寺名のおおりの大日如来が本尊である。鮎喰川に沿って歩きながら、川添えで足を止め、また橋の上からのぞきこむと水が澄み切っていて気分が洗われ疲れが取れます。日常生活の中で日頃の常識とか世間的な価値観に、押しつぶされそうになることも。そんな中で日々を過ごすうちに、本来の自分を見失ってしまうのかも知れません。

しかし歩いていると、そういう人たちが、四国を歩く。もう一度、本来の自分に出会うために、歩く。複雑な日常に比べ、この歩き遍路はとてシンプルです。歩けば必ず辿り着けるという明快な答えがあります。そのことを頭ではなく、自分の体で感じる事が出来ます。

阿川橋より少し先の長瀬橋まで歩く予定より2Kmくらい多く歩く、16時05分バスに乗り一路 岡山へ林原駐車場には19時30分到着した。あと我が家へ

第6回目＝平成20年10月4日(土)初秋の穏やかな町並みに行く

歩き(ウォーキング)遍路 札所5ヵ所(13～17番札所) 約15Km

平成20年10月4日(土) 初秋の穏やかな町並みに行く

歩き(ウォーキング)遍路 札所5ヶ所 約15Km

13番(大栗山) 大日寺

所在地＝徳島県徳島市一宮町西丁 263

電話＝(088)644-0069

○一宮神社の別当寺であったが、明治の神仏分離令で神社の十一面観音像が大日寺に移り本尊となった。本来の大日如来像は脇侍仏である。本堂は明治時代に再建された。門をくぐるとすぐに合掌をしている観音像があり、合掌している手の中に小さな観音像が入っている。「しあわせ

宗派＝真言宗大覚寺派
開基＝弘法大師
本尊＝十一面観音菩薩

観音」と呼ばれ、幸せを願うとご利益があるとされている。



◎十一面観音菩薩について

観音菩薩は姿を変えて衆生の願いに答えてくれるという。多くの面は、救済の多様性を表している。

筆者紀行

岡山林原駐車場をバスで6時50分に出発し、前回歩き終えた長瀬橋の近くに10時05分頃に着き準備を済ませて10時25分から歩き出し、約7.5Kmを2時間10分(途中10分休憩する)で13番(大日寺)に到着する。川の土手、田んぼのあぜ道、細い道、遍路道等を歩いていると近くの人々が手を振ってくれる人、声をかけて頑張ると励ましてくれる方々あり感謝です。そのお蔭で疲れも取れ気持ちよく歩きました。

昼食は大日寺の境内で弁当を食べる。13時15分に14番(常楽寺)へ元気を取り戻して歩き出す。

14番(盛寿山) 常楽寺 所在地=徳島県徳島市国府町延命 606

電話=(088)642-0471

宗派=高野山真言宗
開基=弘法大師
本尊=弥勒菩薩

○境内に入ると、自然の大岩盤で出来た「流水岩の庭園」が広がる。現在も雨風などにより形が変化し続けており、その景観には思わず目を奪われる。弥勒菩薩を本尊とするのは、四国霊場ではここだけ。荒々しい岩の上に本堂や大師堂が建っている。自然と一体となった雰囲気である。本堂前の見事なアララギの霊木は、万病に霊験があるという



◎弥勒菩薩について

釈迦の弟子であり、釈迦入滅から五十六億七千万年後に再び現世に現れる。そのとき如来となって衆生を救済するという。

筆者紀行

13番から歩いて3.3Kmを50分で着く。お参りを済ませ少し休憩する。途中にて又も、お接待を受けるお茶にお菓子を頂く。四国の方々の心ずかい感謝感激です!!世の中で不安や心配事で悩んでいる人に、出来たら、お遍路の道を歩いてみてほしいです。きっと、答えが見つかると思います。そして歩いて得たこと

は、誰にも奪われることはありません。旅から戻ったとき、きつと前よりもひと回り大きくなった自分に気づくと思います。さあ、気分も新たに15番に向け歩き始める。

15番(薬王山) 国分寺

所在地＝徳島県徳島市国府町矢野 718-1

電話＝(088)642-0525

宗派＝曹洞宗 開基＝聖武天皇 本尊＝薬師如来

○聖武天皇は国家の安泰を願い諸国に66の国分寺を建立した。この国分寺もそのひとつで、天平13(741)年に建立された。隆盛を極めたが兵火で焼失、江戸時代後期に再建されている。「鳥瑟沙魔明王」というトイレの神様が祭られていて地元では有名。不浄金剛とも呼ばれ、世の中のけがれや悪を焼き尽くして、不浄を清浄にする徳をもっているとか。トイレにお札を貼ると、下半身の病に靈験あらたかという。

◎薬師如来について

人間の病苦を癒し心の苦悩、厄を取り除くなど12の請願を表わす如来で四国霊場には一番多く祀られている。

筆者紀行

14番から歩いて0.8Kmを10分で15番に着く。お参りを済ませて、次の札所に行く準備を行なう。国分寺までは、田んぼを横目に歩き住宅に囲まれていて入口がどこか分かりにくい。山門をくぐり、目の前に見える重厚な感じの本堂は、とても趣があつて歴史が感じられた。また庭は巨石で石組みされて築山、枯滝などが表された安土桃山時代の古庭園だ。大岩のトンネルをくぐったりもでき、素晴らしかった。

見どころ満載なお寺で満足した気持ちで、16番札所をめざして出発する。

16番(光耀山) 観音寺

所在地＝徳島県徳島市国府町観音寺 49-2

電話＝(088)642-2375

宗派＝高野山真言宗 開基＝弘法大師 本尊＝千手観音菩薩

○天平13年に聖武天皇の勅願道場として創立された。弘仁7年に弘法大師がおとずれ、千手観音菩薩を刻んで本尊とし、脇侍に鎮護国家のために毘沙門天、悪魔降伏に不動明王を刻んで安置。69番札所にも同名の観音寺がある。土塀や石垣のかわりに、寄進額を記した石碑が境内を囲んでいる。子供の夜泣きに靈験あらたかな地蔵尊がある。

◎千手観音菩薩について

千手千眼自在菩薩というのが正式な名前で、それぞれの手に目を持つ。さまざまな持ち物を手にして世界の衆生を救済する。

筆者紀行

15番から歩いて2.2Kmを40分で16番に着く。距離的に近く平坦で曲折がなく、疲れを感じないくらいに早く本堂の前には、如来の足の裏の模様が刻まれた石、「仏足石」が置かれている。如来には「身体が黄金である」、「目が青い」など、超人的な特徴がたくさんあるのだが、「足の裏に模様がある」のも、その特徴のひとつなのだ。境内には、自然石に囲まれた「夜泣き地蔵」という、お地蔵様が祭られていたが、これは、お地蔵様が夜に泣くというのではなく、お参りすると子供の夜泣きが治るといわれている。また、不眠に悩むお年寄りの方も願かけに訪れるとか。願いが叶うと、お札に赤い涎(よだれ)掛けを奉納するのが、習わしになっているそうです。さあ本日予定の最後である17番へ気を引き締めて歩きます。

17番(瑠璃山) 井戸寺

所在地＝徳島県徳島市国府町井戸北屋敷 80-1

電話＝(088)642-1324

宗派＝真言宗善通寺派
開基＝天武天皇
本尊＝七仏薬師如来

○かつては阿波藩主の別邸門であった鮮やかな朱色の仁王門が、参拝客を迎え入れる。この寺を訪れた大師が錫杖で地面を突くと、清水が湧き出る井戸となったという。その井戸は境内に今もある。堂の左側に日限大師堂があり、弘法大師自からが掘ったという「面影の井戸」がある。これは、水不足に苦しむこの地の人々を哀れんで掘ったものとか。この井戸水にうつった大師を石に刻んだ「日限大師」も安置されている。人間の病苦を癒し心の苦悩、厄を取り除くなど 12 の請願を表わす如来で四国霊場には一番多く祀られている。

(七仏)薬師如来について

◎ 筆者紀行

16番から歩いて3.5Kmを1時間で到着し。今日の最後のお寺ですので特に念入りにお参りをする。JR 徳島線の踏み切りを渡る。井戸寺の朱塗りの仁王門には大草鞋が奉納されている。鮎喰川をまたぎ、美しい眉山を右に見て国道192号をさらに徳島市の市街地へと進む。JR 徳島駅付近で国道55号へ。このあたりは徳島市の中心部だ。さらに交通量の多い徳島バイパスを小松島市に向かう。今日は車の多い所、繁華街等で、ゆったりと歩けなく大変に気を使いながらの道のりでした。しかしながら終わってみると今日一日の達成感があり気分は爽快です。17時20分に終わり17時30分にバスで岡山へ帰路に林原駐車場に20時30分頃に着き、あと我が家へ。なお本日の歩数は30,651歩でした。



15 番国分寺聖武天皇勅願所



17 番井戸寺

[参考文献]

「四国八十八ヶ所めぐり、お大師さんに行く遍路⑩コース(昭文社)

「ふらりおへんろ旅一空海と仏像に会いに行く！－(KK 西日本出版社)

「四国遍路に行ってきたマッシュ！(KK PHP 研究所)

編集後記

- 今年度の探訪会は笠岡の高島として、7月30日に下見調査に5名で訪問し、11月20日には若い女性も加わり10名で参加しました。この島で当会の会員である藪田・河田氏らとの交流を深め、お二人の島に対する想いと先史古代に関する造詣の深さに多くを学びました。今後の交流が楽しみです。
- 今回は中島康之氏と楠敏明氏の登場です。中島氏のテーマは邪馬台国九州説に則った論陣ですが、素人の我々には分かり易いですね。また楠氏は理系らしい物の見方がとても斬新です。彼は楯築遺跡のすぐ下の集落で生まれ育ち、今では遺跡の世話をなっている。前回登場の矢吹壽年氏は2月に就実大の仲間と朝鮮の遺跡調査・探訪を計画されていて、次回の寄稿が楽しみです。
- 常連の井上・樋口氏は益々文脈が佳境に入り、「楽しみながら挑戦しています」との事。普段筆を持たない我々にとって、考えを表現する難かしさにはありますが、苦勞した分喜びも大きいのかもかもしれません。読者の方で未投稿の方も勇気を出して一文をまとめてみてください。要望があれば仲間が校正のお手伝いをさせていただきます。
- 大守顧問の要請もあり郵便局の振込口座を開設しました。若狭会長と井上会計担当に奔走していただきました。結構難しい手続きでしたが無事クリアできたようです。会費納入等に活用下さい。
- 次号の原稿を温めておいてください。随時贈って頂きますと編集委員としては助かります。次号は新年度の総会（別途案内状を添付）のあとになります。
なおこの冊子をお届けしたい所が御座いましたら事務局までご紹介下さい。事務局でお届けします。紹介したい入会希望者も同様です。

“きび”考 第5号 2012(平成24)年2月29日発行

発行 日本先史古代研究会

会長 若狭哲六 岡山県備前市東片上 771

事務局 702-8002 岡山県岡山市中区桑野 504-1 山崎泰二

電話=086-276-6654 FAX=086-276-2241

メール=top@bosaisystem.co.jp

編集委員 井上秀男 延原勝志 樋口俊介 本松一郎 丸谷憲二 山崎泰二